
勇者さんの珍道中

黒星天魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者さんの珍道中

【Zマーク】

Z9238X

【作者名】

黒星天魔

【あらすじ】

魔王討伐の使命を背に、勇者が今、動き出す！ついでに、他の何か変なアレみたいな連中も。

1ページ目「勇者わら、旅立つ」（前書き）

題名・勇者わらの珍道中

著者・私

1ページ目「勇者さん、旅立つ」

ある日、それはとてもいい天気の日のことと、魔王が現れたと言います。

「いきなりすぎて意味がわからないよー? それにもうとちゃんと天気選べよ、魔王!」

「勇者さん、偏見で物を言つるのはよくありませんよ。魔王だつて、悪い天気よりはいい天気に現れたいでしょ?」

「いや、だつて、ほら……イメージが……」

「イメージ? 勇者さんは人を外見ではなくイメージで判断するんですか? 最低ですね」

「そういう君は人を外見で判断するタイプなのか!? といつか、魔王、人じやないし……」

「あ、そつそつ。ツツ「コミ」はいいんですけど、勇者さん、その調子でツツ「コミ」ばかりしてたら、ツツ「コミ」だけが取り柄みたいな、そういうキャラ付けにされてしまいますよ」

「誰に!?」

「もつとも、ツツ「コミ」をしない勇者さんに用はないんですけど

「一体何が目的なんだよ!?」

「世界征服」

「君、魔王だつたの!?」

「冗談です。正しくは、世界制覇」

「どう違うんだ!?」

「世界征服は、世界の全てを自分の物にする」とで、世界制覇は、世界の全てに勝つことです」

「どつちも壮大すぎるよ!」

「世界をどうとでもできる力がほしい」

「神になりたいと!?」

「ま、その役は勇者さんに任せますよ」

「任せられて困るよー。」

「殺伐とした世の中にするも良し、犯罪が少しでも減った世の中にするも良しです」

「犯罪は全部なくそりよー。」

「そんな絵空事、現実を見てから言つてください。」

「君もね！」

「はあ、疲れた」

「いやいや！ こちいちツツコミ入れてるボクの方が疲れるよー。」「いちいちツツコミ入れるからじゃないですか」

「君がいちいちボケるからだよー。」

「またそうやつてすぐ人のせいにする。昔からの悪い癖ですよ」

「さも昔からの知り合いみたいな言い方してるけど、ボクと君が出会ったのは今日だからねー。」

「アレですか。勇者さんは幼馴染としか仲良くしないクズ野郎ですか」

「何でそりなんのー？」

「そりんなに昔の女がいいんですか。私の何が不満なんですか」

「やめて！ 付き合つててるみたいな言い方やめて！ さすがに誤解されるわけないとは思つけど万が一にも誤解されたら嫌だからやめて！」

「え……そりんな力一杯、否定しなくても……」

「……え、あ、う……ごめん」

「何マジになつてるんですか？ 何マジに期待してるんですか？」

「……」

「さては、勇者さん」

「……な、何だよ？」

「勇者さんつて、割とチョロロイですね」

「チヨロロイとか言つなー。」

「ちょっと触られただけでも勘違いしちゃうつるなタイプですよね」

「ちょっとの度合いがよくわからないんだけど……仮にドキッとは

しても、勘違いまではしなことよ…」

「ちゅうとの度合には……例えば、肩と肩がぶつかつたときとか」

「普通に謝るよ…」

「本当にですか？ 相手が物凄く可愛い子でも？」

「……いや、そりゃ、ドキッとはするかも知れないけど……」

「可愛い子じやなきやダメって、勇者さん、何贅沢言つてゐるんです

か？」

「今そういう話じゃないだろ…？」

「そもそも、勇者さんつて、あまりモテやつては見えませんしね」「どうこいつ意味だよ！？」

「そのままの意味です。女ウケしないタイプといつか」

「女ウケ！？ ウケないとモテないの…？」

「でも、別にいいじゃないですか。男ウケするタイプ何ですし」「ウケたくねえ！」

「これから先、きつとやつこつ展開があると思いますが、私の前ではイチャイチャしないでくださいね。気持ち悪いので」

「そういう展開は絶対にないので安心してください…」

「そんなこんなで、勇者さんと私の旅が始まったのであつた。

「結局それ、全然意味伝わってないから…」

「素晴らしこオチをありがとつ」やれこます。

1ページ目「勇者わざ、旅立つ」（後書き）

感想：妙なもん書くな！　何勝手に読んでるんですか。

2ページ目「7人の勇者」（前書き）

題名：『冒険の書

著者：アルク

2ページ目「7人の勇者」

遥か昔、魔界より現れし魔王がこの世界を我が物にしようとしました。野に魔物を放ち、手下の魔族に人の住む土地を襲わせ、人々を恐怖と絶望で支配していたという。そんなある日、魔王を倒すべく、一人の若者が立ち上がった。魔王を倒すための壮大な旅は、それはそれは苦難の道程であつたろう。しかし、若者は決して諦めなかつた。人々を助け、また、人々に助けられながら、長い長い旅の中でどんどん成長し、その勇気ある行動は、やがて魔王を倒すに至つたのである。こうして、世界を救つたという素晴らしい伝説を残した若者は、勇者として、歴史にその名を刻んだ というのは、今から千年も前の話だ。嘘か本当かも、現代を生きる一般人のボクでは知ることもできない。

その日、ボクは珍しく自分一人で朝起きた。いつもは母さんに起こされてる。いや、起こされても寝ようと頑張つてるボクだが、そこはしようがない。だつて眠いんだもん。

夢を見たような気がする。千年前の、伝説の勇者と魔王の物語。残念ながら、内容はもう忘れちゃつたし、覚えてたとしてもそれはボクの夢であつて、真実とは遠くかけ離れてる内容だつたろう。まだ暗い室内で、カーテンを開けた。いつもは母さんにそれをやられて眩しいのが嫌いな吸血鬼のように苦しんでいたが、今日は違う。眩しいけど、何だかとつても、いい気分だ。

「…………」

いい気分、だつたのに。

窓の外には、城の兵士たちがズラリズラリと うわ何コレやば そう。

コンコン、と兵士の一人に窓をノックされ、ボクはしばらくボーッとして、やがてカーテンを閉じた。

ドンドン、と今度は強めに窓を叩かれる。何コレ……ボク、何か悪いことでもしたっけ？ 胸に手を当てて考えてみても、心当たりなんてなかつた。昨日は朝から幼馴染のミコウの買い物に付き合わされて、昼ごはんをミコウの家でごちそうになつて、夜遅くなるまで適当にプログラしながらミコウと会話してたぐらいで……うん、やっぱり心当たりはないな。平和すぎて城の兵士さんのお世話になるようなフラグなんて立つわけがない。これは悪い夢だ。きっとそうに違いない。

ドン！ と、やたら強い一撃が窓を襲つた。今のは本気でやばい。ボクの部屋の窓の強度の意外性にもビックリだが、これ以上はやばい気がする。強行突破なんてされるぐらいなら、大人しく窓を開け放つてやろうじゃないか。

だつてボク、何も悪いことしてないし。

カーテン、オープん。

そして、窓、オープん。

「お前がアルクだな？ 城まで来てもらおうか」

まあ、そんなことがあつて、城へと連行されたボクは、てつきり牢屋にでもぶち込まれるのかと思ったのだけれど……なぜだろう 今、王様の前にいる。

けど、ボク一人というわけではなかつた。右に三人、左に三人。鎧やら兜をフル装備した方々が、ボクと同じように立つていた。顔は兜で隠れてて見えない。まるで同じ鎧がズラリと並べられたみたいで、何だか薄気味が悪かつた。

「よくぞ集まつてくれた、7人の勇者たちよ」

王様が唐突にそんなことを言い出した。

……勇者？ ……7人？

ボクと左右の鎧の人たち、合わせると ちょうど7人。偶然では済まされない。というか、王様の視線は明らかにボクの方。周

りで整列している兵士たちの視線も、残念ながら、ボクらの方だった。

「話は既に聞き及んでいるとは思うが、魔王が復活したという噂が徐々に広がりつつある」

……聞き及んでません。

魔王？ あの伝説の勇者に倒されたという？

「そこで諸君ら、勇者の力を受け継いだとされる7人の勇者に命ずる！ 今こそ、その力を世のため人のために示すときじゃ！ 7人の力を合わせ、復活した魔王を倒してまいれ！ 見事魔王を倒した者には、わしの娘を嫁にやろう！ もちろん、王位も譲るつもりじや！ というか何でもやるからとにかく適当に頑張つてくれい！」

適当について……。しかも、力を合わせ

とか言つてゐるのに、それじやあ、魔王を倒した者つて誰になるんだよ……。

「……というか、何で、え……？ 勇者？ ボクが？ ボクと隣の方々が？ 何ゆえに？ 意味がわからないよ……。」

……というか、ボク、まだパジャマだし……。

城から出るまで、ボクら7人の勇者（？）は兵士たちの敬礼と視線を浴びせられ続けた。

夢なら早く覚めてくれ……。

それにして、鎧の人たちは何も喋らない。ひょっとしたら兜に防音効果があるのでと思わされるぐらい、何も話そうとはしなかつた。不気味すぎる……。

城を出て、城下町へと続く橋を渡つたところで、ボクらは立ち止まつた。

「どうも」

……明らかに待ち伏せていたような 全身をローブで隠した上に、カラフルな旗がたくさん刺さつておるという怪しそうな格好の人

が、そこにいた。声は女性のものだったが、怪しいことに変わりはない。

「私は怪しい者ではあつません」

「その格好で言つても説得力ないよー。」

「きなりの真正面すぎるボケを、思わずツツツンでしました。王様にさえツツツンを入れたくなつたボクだが、それでも頑張つて我慢してきたのに、とうとうツツツンを入れてしまつた。負けた気がするのはなぜだろ?」

「いえ、この格好は違うんです」

怪しい女はたいして慌てる素振りもなく、極めて冷静に、しかし、ざぶことなく楽しそうに言つた。

「王宮道化師のバイトをしてまして」

「バイト!? 王宮の仕事がバイト感覚でできちやうの…?」

あの王様ならアリかもしれないと一瞬思つてしまつた。

「本職は、一応、戦士みたいなことをしてゐるのですが、この国は、なんといつか、平和すぎで口クに依頼がなくてですね。ああ、依頼とか言つてもわかりにくいですよね。簡単に言えば、魔物退治とかそれ系のことです。そういうのがなくて、戦士系の職業の人は全然稼げないんですよ。そこで思いついたのが、王宮道化師として雇つてもううとこう

「思いつくのが王宮道化師つて無理ありすぎない!?」

「そうですか? 城つて、たくさんお金ありそうじゃないですか。ていうか、城つてお金でできてるんでしょ?」

「城は石製だよ!」

お金を使って作られた という表現のことを指すんなら、完全に間違いではないけれど……。

「まあそんなわけで、この格好は王宮道化師をしていた頃の

名

「残り、ですかね」

「名残りという言葉をそんなことに使わないでほしいな……」

「そういう君も、人のこと言えないような格好ですけどね」

「いや、これは……」

朝起きてすぐ拉致されたのだから、パジャマ姿でもしじうがないじゃないか。

「趣味の悪いパジャマですね」

「そこ！？ え、趣味悪い！？ どの辺が！？」

「可愛らしいわけでもなければリアルでもないただ怖いだけの熊の辺りが」

「熊じゃないよ！ 犬だよ！」

「え……」

「素でわからなかつたのか……」

……まあ、確かに、熊に見えなくもない。最初見たときは、ボクもこのデザインに驚かされたが、慣れてしまえば芸術的でさえ思えてくる。熊カツコイイ。あ、違うや。犬カツコイイ。

とかなんとか、元王宮道化師の女戦士と話してた間に、鎧着た6人の勇者がいつの間にか5人に減つていた。

それに気づいたとき、もう一人が先に行つてしまい、残り4人。そりや呆れもするよ……。

「そうそう。私がどうしてこんな所にいたのかと言うと、実は7人の勇者さんにお話しがあつて待ち伏せていたんですよ」

「もう5人しかいないよ！ 何でもっと早くそれ言わないの！？」

「この程度のギャグについてけないようなクズ勇者に用はありませ

ん

「ギャグ！？ クズ勇者！？」

敬語を使ってるからと言って、それが汚い言葉だと意味がない。

というか、破壊力が増しているような気がする……。

あ、また一人去つた。

「大体、勇者ともあらうものが、7人掛かりで魔王を相手にすると

いうのが気に入りません。あなた方に誇りといつものはないんですね
か？ 恥を知りなさい」

「……うん」

一見、正論のような気もするが、この人にだけは恥を知れとは言
われたくなかった。

今の発言で二人が去り、残るはボクと鎧の人が一人だけ。その鎧
の人も、去つて行く人たちを見てあたふたと落ち着かない様子だ。
たぶん、自分も行きたいのだろうが、なかなかここを去る勇気が出
ないのだろう。

「言い過ぎましたかね。クズ勇者と言つても、鉄クズと一緒にではな
いので安心してください」

「それ謝る気ないよね！？」

最後の一人が、申し訳なさそうにこちらを見て、手を合わせて頭
を下げる動作までして、走るようにしてこの場を去つていく。
さて、とうとうボク一人になってしまった。

何でボク、最後まで残つてるんだろう。

「では、勇者さん。あなたの旅に、私も同行させていただきます
「誇りはどうしたの！？ 恥は知らなくていいの！？」

「何言つてんですか、勇者さん。恥も誇りも、命には代えられませ
ん。相手は魔王ですよ？」

「ボク一人残つたところでそんなこと言われても説得力なさすぎだ
から！ ……というか、ボク、やっぱり旅に出なくちゃいけないの
かな……」

未だに自分が勇者だという自覚がない。

「というか、王様の勘違いという可能性もあるし……。

女戦士は、表情こそローブの頭巾に隠れて見えないが、たぶん、
微笑を浮かべながら、こう言つた。

「それは、あなたの決めることです」

意外な言葉に、少し驚いた。

何だ、まともなことも言えるんだな、この人。

ボクがもし本当に勇者だつたら……魔王が復活したというなら……世のため人のため、旅に出た方が正しいのかもしない。だからと言つて、一般人として過ごしてきたボクが、いきなり勇者だと言わねたぐらいで、旅に出なきゃいけないなんてことはないかもしない。

どちらが正しいのか、どちらが間違いなのか、すぐには判断できないけれど、それでもボクは、決断すべきなのかもしない。

勇者として、とくに勇者は、人として、迫られた選択は、いつか、いずれ、きっと、選ばなきゃいけない、そんな気がした。

「……と、とりあえず、今日のところは家に帰らつかな……。母さんとも、ちゃんと話したいし」

「わかりました」

「……ん？」

そこでなぜか、腕を掴まれた。

「そんなに今すぐ旅に出たいのですか」「え？」

「さすがは勇者さん。家族との別れも必要としないとは、勇者としてこれほど力のない決断はありません。あなたにはちゃんと誇りがあるような気がしてきましたよ」

「え、ええーつ！？」

「さあ、行きましょう。確かに、あんなクズ勇者共に先を越されるわけにはいきませんからね。勇者さんの言葉の裏には野心すら感じますが、そんなあなたを私は尊敬の念すら抱かざるを得ません」

「ちょ、ちょま」

「私なら大丈夫です。しばらくは王宮道化師の格好のままの旅も良いでしょ？」「う」

「ボクが嫌なんすけどー！？」

そんなボクの訴えにも耳を貸さない女戦士は、親に別れすら言え

ない上にパジャマを着たままのボクといつ魔者（？）を強引に冒険の旅へと引っ張り出したのであつた。

「言ひ忘れました。私の名は、ハーシュリーと言ひます。眞輕に女戦士とでもお呼びください」

「せ、せめて武器だけでも買わせてーーー！」

残念ながら、ボクの必死の叫びは、何もかも、彼女の耳には届かなかつた。

2ページ目「7人の勇者」（後書き）

感想：未だに意味がわからない……。
自分で感想書いてどうするんですか。

自分が文章書いたのに

3ページ目「勇者わん、学ぶ」（前書き）

題名・勇者わんの珍道中

著者・私 何で名前書かないの？

3ページ目「勇者さん、学ぶ」

勇者の冒険における最初の試練とは、スライムと戦う」とだと私は思うのです。

「……いや、ボク、武器すらまだ持っていないんだけど……」

「大丈夫。スライムなら探せばすぐ見つかります」

「いやそういうんじゃなくて……見つける！？」

「は」

「どうして！？」

「あれ？ もしかして勇者さん、知らないんですか？」

「え、何が……？」

「ほら、昔は魔物が人を襲つてたでしょ？」

「うん。そう聞いてる。……って、まさか……！？」

「ええ、今は人が魔物を襲う時代なんですよ」

「どうして！？」

「一回田ですよ、その台詞。少しは自分で考えたらどうですか」

「え……うーん……う、腕試し、とか……？」

「はあ……」れだから子供は嫌いです」

「ひ、ひどい……。し、しょうがないだろ！？ 慢じやないけど

ボク、めちゃくちゃ世間知らず何だよ！？」

「威張つて言つことですか。」れだから田舎者の子供は^{おふくろ}」

「悪口が増長した……」

「いいですか、勇者さん。そもそも、千年前に魔物が人間たちにしきたことを考えてみてくださいよ」

「ああ、えつと……襲つてたつてことは、その……やつぱり、身ぐるみ剥いだり……」

「言い方がぬるいです。身を剥いだぐらには言つてほしいのですね」

「怖すぎるー。」

「まあ、簡単に言えば、襲われた人間は大抵の場合、死にます。助かりません」

「そ、そりゃ……やつぱり……」

「襲う理由は色々ありますが、一番わかりやすいのが、彼らの魔王のためですかね。でも、それはただの建て前であって、連中の本音は、人間を餌として食べたいだけだと思いますよ」

「ひ、ひどい……」

「そうですか？ 私たち人間だって、命ある動物を殺して食います。その動物だって他の動物を食べたりします。弱肉強食、食物連鎖。それが自然界の摂理というものです。ひどいと思う方がよっぽどひどいですよ」

「……言つてることは間違つてないと思つんだけど、ボクにはまだよくわからぬよ……」

「子供という特権を活かして逃げようとしないでください。勇者さん、あなたはちゃんと成長しないといけません。もう一度と、同年代の子供たちと同じ立場だとは思わないでください。勇者とは、人々を導く存在なのですから」

「……努力、するよ」

「努力、ですか。あまり良い返事とは言えませんが、今のところはそれで許しておきますよ。さて、話を戻しますが、魔物が人を襲う理由と人が魔物を襲う理由にたいした違いはありません」

「……へ？ どういうこと……？」

「人は人のために魔物を倒す 　 といつのが建て前で、本音は餌として食べたいだけです」

「ええーっ！ 魔物を食べるの！？ 　 といつか食べれるの！？」

「本当に田舎者丸出しですね。食用の魔物だってそりやいますよ。腹が減つた旅人はその辺の食える魔物を自分で狩つて食べるんですね」

「えー……何か急に原始的な話になつてきた気が……」

「もちろん、欲望の塊である人間が、ただ食うことだけに留まるはずもありません」

「……と言つと？」

「金になります。食用としてはもちろん、毛皮とか角とか、用途は多岐に渡りますが、色々なアイテムになります。生きたまま欲しがる人もいますが、これはペットにしたり、こき使つたりするのが目的かと思われます。いやはや、人間つて素晴らしいですねえ。本当、色々な意味で」

「そ、そうだね……」

「というわけでスライムを襲います」

「……えつと、それ聞いた後でもちよつとよくわからないんだけど……スライムつて、食べれるの？」

「はあ？ 勇者さん、あんなのが食べたいんですか？」

「あつれーーー？」

「パジャマの趣味が悪ければ食べ物の趣味も悪いんですね」「パジャマ関係ないし！ それに食べれるかどうか聞いただけじゃん！」

「食べれるか食べれないかと聞かれれば そうですね。まあ、一部の人を除き食べれませんけど」

「一部の人ーー？」

「ゲテモノ食いマニアとか

「いや、それでもさすがに食べれない物までは食べないと思つけど……」

「勇者さんのような奇特な人とか」

「もうやめてー！ というかボク魔物自体食べたことないしー！」

「まあぶつちやけ、普通は魔物なんか食べませんけどね」

「つて結局嘘かよー ぶつちやけるタイミングが遅すぎるとー ちよつと信じちゃつてたしー！」

「まあ食べる食べないはともかくとして、早くスライムを見つけて倒しましょう」

「……だから、どうして？ 捕まえたりするの？」

「いえ、殺しますけど？」

「あつせつ言つなあ……。スライムって何か悪いことでもする魔物なの？」

「あんな弱い魔物に悪いことなんてできるわけないでしょ！」

「じゃあ、何で……？」

「古来よりスライムは初心者に倒される運命と決まっています。そういうじつ敵キャラなんです。彼らも役割を果たせるなら本望でしょう。さあ、レッソーハンティング！」

「いやいやいや！ 頼むからやめたげてよ！」

「さつきから何ですか？ まさか勇者さん、戦うのが怖いからそんなこと言つてるんじゃないでしょうね？」

「違う意味でだけどね！ 特に実害もないような相手を、魔物だという理由で殺すことなんて、ボクにはできない」

「ほう。では、実害があれば殺せるんですね？」

「え……いや、でも、スライムは悪いことできないって……」

「嘘です。スライムはえーと人間を溶かして捕食とかしますよ」

「その発言が嘘だろ！」

「え……何で、わかつたんですか……？」

「君の言つことは大体が嘘だということをボクは学んだよ……」

「いや、私が学んでほしいのは戦闘経験ですよ。スライムと戦つて、少しでもレベルを上げなくてはなりませんからね」

「……腕試しつて答え、ぶつちやけほとんど当たつちゃつてるよね、それ……」

まあ、乗り気じゃない勇者さんのこと、初めから期待などしてませんでしたが、この分だと、実害のある魔物を探す必要がありそうです。

「どいかに襲われる村とかありませんかねえ」

「物騒なこと言つなよ！」

今回も素晴らしいオチをありがと「びざこます。

3ページ目「勇者さん、学ぶ」（後書き）

感想：ボクとの掛け合いしか書かないんだね……。
ーの方は勇者さんに任せます。

ストーリ

4ページ目「スライム」（前書き）

題名：『冒険の書

著者：アルク

4ページ目「スライム」

元王宮道化師の女戦士 ハーシュリーと名乗った女性に、半ば強引に旅立たされてしまったボクは、今日、生まれて初めて、魔物といつものスライムをこの目で見た。
どんなリアルなドロドロが出てくるのかと思えば……、

「……可愛い」

何とも愛らしい顔をした とても小さな存在だった。

女戦士が言っていた ペットにする人もいるといつのは、案外、本当のことなのかもしない。

「可愛い? あれがですか?」

あからさまにひいてる感じの女戦士に、しかしボクは自分の感性を信じた。

「何といつか……つん、この世のものとは思えない可愛いだね」

「まあ、本来は魔界にいた連中で、この世のものではありませんが」「あんな可愛い生物を倒そうだなんて、まったく……ひどいよ、女戦士は」

「え? 女戦士は職業であつて名前じゃないですよ? 勇者さん、そんなこともわからなかつたんですか?」

「君がそう呼べって言つたんだしょ!」

「そうでしたつけ?」

「ほんの数時間前の出来事だよ……」

それにもしても、朝から超展開が多すぎる田だ……今日はボクの超展開日だな。

パジャマ一枚というボクと、自称王宮道化師の格好な女戦士の旅立ちの田。

一体、どうやって魔王を倒すといつのか 想像もつかない。

「そんなことより、早くあのスライム倒しちゃいましょうよ」「さっきボクが言ったこと、覚えてる……?」

「はい。『ひれ伏せ、世界』、ですよね。勇者さんの痺れる名言は
バツチリ記憶しますよ」

「そんな痛いこと言つた覚えはないよ…」

「どんな記憶の仕方をしたら、そんな捏造が入るんだよ。」

「ああ、『世界よ、ひれ伏せ』の方でしたか」

「言つてること変わつてないよ…」

しかも、それじゃあ、どっちも言つたみたいじゃないか。痛いに
もほどがある。

「だから、ボクはスライムを倒す気なんてないんだって」
「何の罪もないのに、どうして倒さなくちゃならないんだ。
強くなるためだからって、そんなの、弱い者いじめと何も変わら
ない。」

「じゃあ、戦つてわざと負けたらいいじゃないですか」

「意味がわからないよ！？ 戦う必要がないって言つてんの…」

「この人、どんだけボクを魔物と戦わせたいんだよ…。」

「どうしても、嫌ですか？」

「しつこいなあ！ 嫌つたら嫌だよ！」

「スライムの方から襲いかかつてきても？」

「こつちから何もしなければ大丈夫だよ、きっと」

「試してみましょつ」

「え？」

ボクが何かを考える前に、女戦士は既に行動を起こしていた。

「けぺつ」

端的に言つて、ボクは蹴られた んだと思つ。

お尻痛いし。地面、顔打つたし。

スライムとは結構な距離を保つていたはずだけれど、その一回の
蹴りでボクは目の前にまで来てしまった。

当然、スライムの方がビックリして、数歩後ろに下がつていた。

ゼリー状の体に汗のよつたものが滴り落ちてこる。

「い、いきなりなんなのー?」

……喋った。

え……何これ……魔物つて喋るの……? 動物のよつて鳴くだけと思つてたけど、今はつさりとボクの耳に届いてきた音は、完璧に人間の言葉だつた。

「に、にんげん! ? あ、ああ、あんたにんげんじゃないー! ?」

「え……あ、うん」

慌て方が尋常じやない。

まあ、それはボクも同じなんだけど……。

「い、じろされるー! ?」

「えー?」

「じろされるー! ? あんたあたしをじろされるわねー! ?」

「殺されるー? い、いや、誤解だよー。ボクは君を殺そつなんて氣はなこよー」

「つそ! ? ほんと! ? じつちなのー! ?」

「ほ、本当だよー。嘘なんてつかないー」

「えええー! ? ジヤ、ジヤあ……べつにここや」

「…………」

わつとまでの荒びぶりが嘘のよつて、スライムはホッとして言つた。

「じつじよつ 魔物のテンションがよくわからぬ。」

「どこからツツ 口めばいいんだ……。」

「勇者をーん、独り言はこいですから早く戦つてくださいー」
わづくつとじりじりに歩いてきた女戦士がそんなことを言つだした。

独り言……? 」

「つて、魔物が喋れるんなら早く言つてよー」

ますます倒そなざとは思えなくなつた。

どうやら話も通じる奴みたいだし。

「は……？ 何馬鹿なこと言つてんですか？ 頭でも打ちましたか？」

？

「お尻蹴られて顔なら打つたけどね！」

今更だけど、凄く痛い。

痛いで済んでるのは、幸いだったのかもしれないけど……。

「またにんげん！？ あたしころせるき！？」

「殺さない殺さない！ 大丈夫だから……たぶん」

「ならいいや」

「……」

「こいつ、わざとせつてるんじゃないだらうな……。

「まひ、今喋つたでしょ。このスライム」

「……勇者さん、すいません……」

「え……？」

「強く、蹴りすぎてしまつたようですね、頭を」「お尻だよ！」

謝る気ないな、絶対……。

「お尻お尻つて何ですかさつきからノーティーの前で。恥知らずもここまでくると変態ですよ」

「思いつきじ蹴つといてよく言つなあ……」

「だから謝つてるじゃないですか」

「誠意が感じられない……」

「はあ……服を脱げば、私の美しい裸体を拝ませれば、それで満足ですか？」

「脱がなくていいよ！ ボクを変態にしたいの！？」

「はい」

「即答した……」

自分で美しい裸体とか言つてるけど、そんなに自信あるのかな……。

いや、もちろん、見たいとは思わないけどね……。

「どうか、話が進まない。」

「話が進まなくてお困りですね。そんなときの便利な言葉がありますよ」

「その原因のほとんどを作り出してるって自覚はある……？」

「知りません、そんなもの」

「ですよねー」

「それはさておき つまり、閑話休題」

「それ、ボクが言った方がいいと思う……」

閑話休題。

ボクはスライムが人間の言葉を話することを女戦士に告げた。
「どうか、彼女の目の前でもしつかりと喋ってるのだから、言つ
までもないと思つたのだけれど どうやら、女戦士にはただ鳴い
てるようになしか聞こえないらしい。」

「魔物の中には、確かに喋れるような珍しい奴もいますが、スライ
ムが喋るなんて聞いたことありませんよ」

「でも事実だし……」

ちなみに、見た目通りに可憐らしい声をしている。喋り方からし
て、たぶん、メスのスライムだと思うけど あれ、スライムに性
別なんてあるのかな。

「こんな間抜け顔のスライムが喋れるなら、猿だつて喋れるでしょ
うに」

「間抜け顔！？」

「ひ、ひどい！？」

ボクに続き、スライムも一緒になつて落ち込んだ。

このスライム、人間の言葉 ボクじゃなくて、女戦士の言葉も
わかるようだ。
「ということは、スライムの声を聞き取れるボクの方がおかしいの
かな……。」

「しかし、困ったことになりました……」

女戦士が顔に手を当ててそんなことを言って出す。

「困ったこと……？」

「はい」

なんだらう……あの女戦士が困るなんて。

「勇者さんがスライムと戦いたくないあまりにスライムが喋れるとか頭のおかしなことを言に出すなんて……」

「そろそろ信じてくれてもいいんじゃないかなー!?」

そのネタでビームで引っ張るつもりだよ……。

そりゃまあ、簡単に信じるなんてできないぐらい不思議なことかもしれないけど、それにしたって、少しごらには話合わせてくれるぐらいしてくれたつていいじゃないか。

そんなにボクが信用ならないのか……？

「お手」

「わーい」

女戦士が手を差し出してビーム、スライムはそれが条件反射のよひに手の上に乗った。

「勇者さん。このスライム、ビームやひの葉がわかるみたいですよ」

「……ああ、うん……」

ボクの言葉は、ビームの人に届かないのだらう。

「む。ところどは、勇者さんせのスライムと話せぬところとですね?」

「さつきからずっとそういう言ひてるよー?」

「俄かには信じがたいですが、今のお手を見る限りでは、ビームやひ

嘘ではなさそうですね」

この人、言葉よりも、行動で示した方がわかつてくれるタイプの人なのか……めんどくさいなあ。

そして、お手といつよつは、お乗りつて感じだつた。

見た感じスライムには手なんてないから、自ずとそつなつてしまふのはわかるけれど……。

「にんげんなのに」ふたふたきないしー、とてもとーてもいいにんげんなのねー」

スライムが「ゴー」と微笑みながら、自分の体を女戦士の手にスリスリしている。

か、可愛い……そして、うらやましい……。

「何ですか、こいつ急に、私の手を溶かして食つ氣ですか。勇者さん翻訳」

「とてもいい人間だつて、関心してゐみたいだよ」

「関心?」

「たぶん、人間=殺される、つて思つてたみたいだから」

「まあ、間違つてはないですけどね」

「……」

女戦士のスライムを見る目が まあ目は確認できないんだけど みるみるうちに殺気に変わつていくような気がして、

「スライム逃げてーーー！」

と力一杯に叫ぶ。

「え、なんでー？」

そんな殺氣にもボクの心配にもまつたく氣づかない能天氣スライムは、逃げるどこのか女戦士の肩にまで登つていた。

そして頬擦り。

「何ですか、こいつ。地面に叩きつけて潰していいですか」

「ダメーーー！ なついてるんだよー！」

「私には上から目線で『パン買ってこいや』と言つてゐるよ」にしか見えません。異様にムカつきます」

ー お願いだから気を落ち着けて！」

女戦士は肩に乗つかるスライムを握ると、腕を大きく振りかぶる。
やつぱり、ボクの説得は意味がないのか……。

たかいたかいー！？

スライムは楽しそうだ。

この無邪気な笑顔が、鬼畜女に壊されようとしているのか……ん？

スライムは人間の言葉がわかるから、女戦士の言つている言葉やこうとしていることは、わかつてもいいはずなのに。それなのに、楽しそうに笑つていうのには、一体、どうこうことなんだろう?

女戦士は振りかぶった腕を止めたまま、微動だにしなくなる。何かを考えるような、そんな間をあけてから、スライムを解放して地面に置いた。

一
勇者さん

え……あ、何？」

三三

「ああ、うん。そうだけど

「人間を見て最初に思うことが殺されるって、この魔物の心にそれが染みついてるからだと思うんですよ」

確かに。

人間は自分たちを殺すものだと認識していたからこそ、咄嗟にあんなことを言つていただろう。

その認識が魔物としての遺伝なのか、スライムの過去に何かあったのかまではわからないけれど それは何だか、人間の身としては、心が痛むし、とても悲しい 切ない気持ちになる。

「でも、このスライムは、私が本気で殺氣を放つても、震えたり、瞼する様子はまったくなかつた。ただ鈍感なだけなのか しかし、

殺氣を感じれないというのは、どれほど弱くて儻く、どれほど無邪
氣で純粹な心があるというのでしょうか」

意外だった。

ただの鬼畜女と思っていたけれど、何も考えずに暴虐の限りを尽
くすひどい人だと思っていたけれど。

実はそんなことはなかつたのかかもしれない。

彼女はただ、冷静に物事を見定めていただけなのだろうか。

「どうします？」

「え？」

「このスライム」

女戦士が指差した先で、スライムがブヨブヨと動いている。
「仕方がないのでこのまま何もしないのも良しとしますが、このま
ま何もしないでいれば、いつか必ず、殺されますよ 人間に」
あの6人の勇者は、まだここには来てないのか、もう先に行つ
しまつたのかはわからない。

まだここには来てないとしたら、いつかはここを通り、このスラ
イムと遭遇する可能性もあるだろう。

そうしたら 人間として、勇者として、魔物は倒して行くかも
しれない。

殺されてしまうかもしれないんだ。

「……ほつとけないよ」

「だから、どうしますかと聞いてるんです」

「……あ」

それは、ボクが勇者として、このパーティのリーダーとして、決
めなくてはいけないことなのだと実感した。

「……うん。じゃあ、連れて行く」

スライム つまり、魔物と関わるということは、勇者としては
いけないことかもしれないけれど そんなことは関係ない。
大事なのは、勇者^{ボク}の意思だ。

そうしたい と今決めた。

「スライムを仲間にしよう」

ボクみたいなのが勇者で、変な女に無理矢理旅に出されて、魔物であるスライムを仲間に入れた そんな不思議パーティが結成されてしまった今日この頃。

青空はどこまでも澄んでいて、魔王が復活したとは思えないような いや、魔王が復活していたとしても、今日は、とても天気のいい日だった。

「名前はポチにしましょう

「犬じゃん！」

「わんわんー！」

「あれ、意外と気に入ってる……？」

……とはいって、まだまだ今日といつこの日は続くのである。

4ページ目「スライム」（後書き）

感想：いいにんげんはすきなのね！？
て手がないんじゃ……？
…………あれ、スライムっ

5ページ目「勇者たち、特訓する」（前書き）

題名・勇者たちの珍道中

著者・ハーシュリン 名前が微妙に違つて？

5ページ目「勇者さん、特訓する」

私と勇者さんの旅に、新しい仲間　スライムのポチが加わりました。

「きゅきゅーー！」

「ポチがベタベタしてきて気持ち悪いのですが、やっぱり始末してもいいですか？」

「だ、だからダメだつてばー！　船のひと、気に入つてるだけ何だからや……」

勇者さんがわざわざ私の方をチラチラと見つめてくれる。

「あ、もしかして、嫉妬とかしますか？」

「べ、別に……」

「安心してください。私、別にポチのこと好きじゃありませんから」

「いや、だから、別にしてないって」

「凄まじい勘違いをされてるようだ……」

「私ではないとすると……まさか勇者さん、魔物スライムが好みだつたんですか？」

「マニアック過ぎてさすがにつけてけませんよ」

「確かに愛情は持つてるつもりだけれど、そういう意味で好きなのはまた違うから！　普通に考えたらわかるでしょうー？」

「でも、勇者さんの感性つて、普通とはかけ離れてるじゃないですか」

か

パジャマの趣味の悪さもそりですが、スライムを可愛いとか言つちゃうような人を、普通は普通とは言いません。

「ちゃんと家に帰れたらまともな格好もできたはずなのに、誰かさんのがいいで……」

「私が悪いみたいな言い方ですね」

「自覚ないんだ……」

「勇者さんはわかつてないだけですよ」

「わかつてない？」

「誰だつて最初は初期装備です」

「パジャマがボクの初期装備！？」

「私と出会つたときに着ていたのでそつなりますね」

「あくまでも自分基準なんだ……」

「この世界に自分以上に大切なものなんてあるんですか？」

「う……また答えづらっことを……」

「即答できないということは、勇者さんも自分が一番大切なクズ人間側ということですかね」

「……そういう女戦士はどうなんだよ？」

「私がクズに見えるとでも？」

「違うとでも？」

「違いますよ。私はレズです」

「何そのいきなりすぎるカミングアウト！？」

「やだなあ、冗談ですよ」

「……うん。まあ、どっちでもいいけどさ」

「は？ 私がもし冗談じゃなくレズだとしたら、勇者さんとのフックがなくなるんですよ？」

「……女戦士の方がボクに惚れてたりして……」

「冗談は顔だけにしてください。この童顔」

「年相応だよ！」

「そういえば勇者さんつて、7人の勇者の中では間違いなく最年少ですよね」

「あの鎧着た人たちの年齢なんて知らないよ……顔も見てないし」

「そうですか。私は知つてますけどね」

「え、そうなの？」

「そりやそうですよ。王宮道化師やつてたんですから。城に集められた勇者たちの顔ぐらいちやんと見てます」

「そもそも何である鎧なの？」

「あれは王様の趣味です」

「趣味！？」

「各勇者に贈られた装備で、王様が勇者たちを見送る際に着るのよつて言われていたものです。ちなみに呪いがかかって声が出せません」「何で呪われた装備で！？」 そんなにカツコイイとは思えなかつたけど！？」

「だから、王様の趣味ですつて。王様はあれがカツコイイと思つてるんですよ。笑つたら極刑ものですよ」

「極刑！？」

「私はこつそり笑つちゃいましたけど

「別に笑える装備でもなかつたよ！？」 ていつか極刑はどうした！？

「大丈夫です。王宮道化師なんて、常に笑つてゐるよつなもんですか
ら」

「そのフードの中でピーロのマイクでもしてんの！？」

「してませんよ、そんなもの。勇者さんはピーロ女がお好みなんですか？ 特殊ですね」

「話を勝手に飛躍させないで！」

「……あれ？ そついえば、勇者さん。結局は何の話をしたん
でしたつけ？」

「勝手に話を方向転換しまくつた挙句にその発言はどうなの！？」
「まあ、いいです。私が最初から言つたかったことだけはちゃんと
覚えてますから」

「言つたかつたこと？ なら早く言えばいいのに……」

「スライムを倒したくないといつ勇者さんを他の方法でレベルアッ
プさせようかと思いまして」

「他の方法？ どうするの？」

「決まつてるじゃないですか」

「本当に何もわからないといつような顔の勇者さん。
やる」とは決まつてゐるといつのに、愚かしことにの上ない。

「特訓ですよ」

その特訓は、夕日が見え始める頃まで続きました。

「だらしないですね、勇者さん」

「ハア……ハア……いや、ハア……だつて……ハア……無理、だよ
……ハア……こん、な……ハア……」

「たかが数時間、私と打ち合つただけで何をそんなにハアハア疲れ
てんですか」

「5時間も6時間も大人と打ち合ひして疲れない子供がいるのかと
いう疑問に対する答えを先に言えー！」

「意外と元気じゃないですか」

「……も、もう、無理……」

今の叫びで力を使い果たしたのか、勇者さんはその場に仰向けに
倒れてしまいました。

「あ、気絶してる。

少々やりすぎてしましましたかね。

しかしこれで勇者さんのレベルも少しは上がった ような気も
しますし、結果オーライです。

「きゅーいー？」

「殺したわけじゃないですよ。朝になれば目を覚します。 今
日は、野宿でもしておきますか」

「きゅーきゅーいー！」

ポチと二人きりじや、文字通り話にならないので、今日はこの辺

にしてもそれも。

5ページ目「勇者やさ、特訓する」（後書き）

感想：死ぬかと思ったよ……。 チッ……生きてましたか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9238x/>

勇者さんの珍道中

2011年11月12日03時13分発行